



レコードを聴く楽しみとこだわり

私の唯一の趣味はレコードを聴くことだ。それは中学生の頃からだから、もう半世紀は経つ。趣味はこれしかない。もちろんCDも買うし、サブスクリプションも利用しているのだが、好きなのはやっぱりアナログ・レコード。いわゆるレコード・マニア（オタク）である。真空管アンプとでかいスピーカーから発せられる爆音を浴びるのが、なんとも気持ちがいい。今の職場に赴任してから週の半分は一人暮らしだが、1階の角部屋なので深夜でない限りは音量もあまり気にしなくてもよい。

休日のデューティは専ら原稿書きなのだが、そう簡単には捗らないものである。原稿書きに飽きてくると「さてレコード聴くか」となる。その時間が何よりもリフレッシュになるのである。平日でも1時間、休日なら3時間はレコード・ジャケットを眺めながらただひたすら（何もせず）に聴いている。音が一番よく聴こえるスイート・スポットがあって、座る位置も決まっている。その位置が10センチでもずれるともう聴こえ方が違って気になってしまう。真空管を使ったオーディオセットなので、電源を入れて少し待つ。ジャケットから取り出されたレコードをハケでサッとクリーニングして、ターンテーブルに載せ、針先にじっと目をこらし埃がついていないかチェックする。やっと準備完了。慎重にレコードに針を落とす。最初に出てくる音を聞き逃したくないからあわてて例の位置へ戻る——文字にしてみるとわかるがなんとも儀式的である。

もちろんレコードそのものにも相当のこだわりがある。Beatlesのような有名アーティストの1つの作品はそれこそ数百万枚以上プレスされているわけだが、同じ作品でもプレスされた時期によって音質が違う。リリース当時のオリジナル盤、できれば初回盤がほしい。そのアーティストが実際に聴き・認めた音楽を聴きたいわけだ。有名アーティストはよく研究されている。レコード溝の内周に刻まれているマトリックス番号（アルファベットと数字、記号、時にはレコード・ラッカーを切り出したエンジニアのサインがある）を見ればそれがわかる。知らない人にとってはチンプンカンプンで、どうでもいいことのように思えるだ

ろう。レコード代にいくら費やしたか考えたこともないが、安いマンションが買えるぐらいはつぎ込んでいる。

どんなものを聴くのか。ジャンルはロックが中心だがジャズやクラシックも聴く。惹かれるのはほとんどが1960年代後半から1970年代前半までの音楽だ。もちろんリアル・タイムで聴いたものもあるのだが、この時代の音楽は多様でとても生き生きとしている。アーティストは売れる・売れないよりも自分がやりたいことをやっている。そこには「音楽で何か（それは自己の精神であったり、より大きな世界であったり）が変わるかもしれない」という思いが込められている。そのような「可能性」を無邪気にも信じていた時代ともいえるかもしれない。英米を中心としたサイケデリックやプログレッシブといったジャンル、それから1970年から1975年ぐらいまでのアメリカン・ポップス（ポップスに限ってはこの時代のものが最高だと思う）、大学時代にハマったアバンギャルドやノイズもの、ヨーロッパ（イタリア・フランス・ドイツ・北欧・東欧・トルコ）や南米（ブラジル・アルゼンチン）のロックなど。好きが高じてマイナー音楽雑誌でレコード・レビューを書いていたこともある。大学時代は周囲から完全に「浮いていたな」と思うのだが、今になってはそれも良い思い出である。

レコードを聴きながら「これが好きなんだよなあ」と思うと同時に、それが自分なんだとも感ずる。音楽・レコードはもはや「自分自身」の一部になっている。そういえば若い頃から「人と同じであること」がひどくつまらないことのように思っていた。若者ゆえの天の邪鬼だったのかもしれない。ただ、今はもっと自然に一人ひとりがみんな違うところが面白いし、音楽の趣味嗜好などはまさにそうだと思う。何が好きだっていいじゃないか。だから他の人が好きなものにケチはつけない。

私の趣味のレコードへのこだわりを紹介してみた。発達障害の特徴の1つに「こだわり」があるが、私のそれはうっかりするとその水準かもしれない。でも、それでいいじゃないかと思う。

古茶大樹